

2017年8月29日

報道各社御中

「ベビーカーと交通機関についてのアンケート」調査報告と提言について

あすぷろ実行委員会

委員長 上坂洋文

東京都江東区有明 1-4-11-425

assystars@yahoo.co.jp

担当理事 三次由梨香

(赤ちゃん子育て中の江東区区議会議員)

mitsugi@3next.co.jp

080-3213-1333

報道各社におかれましては日々ご清栄のことと存じます。

私ども、あすぷろ実行委員会は、アシスターを日本中に増やしていくプロジェクト（ASSYstar's Project）を運営する任意団体です。

※私たちは、できないとあきらめている人、困難を抱える人々をアシストする人、多様な人々が共に人生を楽しむためのアシストをする人をアシスターと呼んでいます。

2016年4月13日に発足以来、「赤ちゃん&ママアシスターズ」、「こども応援」をはじめ「アレルギーや過敏症等」、「介護とリハビリとトレーニング」、「障がい者の社会進出」、「エンド・オブ・ライフ」、「おとなの発達障害」の分野を設け、それぞれに実行委員を置き、ホームページ、フェイスブックページでの展開を含むPR活動を行っています。実行委員の数は現在55名となっています。

<http://www.assystarsproject.net/>

このたび、子育て環境の充実に向けて、是非鉄道各社・バス各社様にご対応いただければと存じ、表題の調査報告と調査結果に基づく提言書を本日付にて提出いたしました。

ベビーカーで電車・バスなどの交通機関を利用される方500名を対象とする39問の調査となっています。

アンケート結果の詳細は上記ホームページのTOPページの活動紹介からもご覧いただけます。

報道各社におかれましては、ご周知の上、報道いただければ幸甚でございます。

なお、本年3月には電鉄12社にベビーカー優先車両導入に関する要望書を提出し、8社より回答をいただきました <http://www.assystarsproject.net/posts/activity26.html>。

ベビーカー優先車両導入は難しいとする回答が多かったのですが、では実態はどうなのだろうかということで、あすぷろ実行委員会として、今回のアンケート調査を実施することとしました。

今回のアンケートを実施するにあたり、あすぷろ実行委員会の渡邊玲子理事（日本開業保健師協会理事）が、話してくれました。参考まで。

『私が子育てしていたスウェーデンでは、何処へ行ってもベビーファースト つまり、ベビーカーファーストでした。

電車もバスも路面電車も、赤ちゃん(ベビーカー)が入ろうとすれば体力に自信がありそうな男女が寄ってきて手伝ってくれました。

はじめは照れ臭くて「No thank you!」と、言っていたら、ある時、スウェーデン人の友人から「あなたを助けるのではなく、まだ歩けない赤ちゃんを助けるのが、この国のモラルなんだから、大手を振って力を借りなさい!」と言われました』

なお、国は国土交通省（平成26年3月26日発表）の「公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会とりまとめ」のII.3.(1)ベビーカーの折りたたみにおいて、「車内への持ち込み可能なサイズを超える場合、バス車両の構造上折りたたまずに持ち込むことが困難な場合、走行環境が厳しい区間を走行するバスの場合などを除き、公共交通機関においてベビーカーを折りたたまずに使用できるよう取り扱うことを基本とした。」とされています。

送付先：JR東日本、京王、小田急、東急、西武、東武、京成、京急、相鉄、東京メトロ、都営地下鉄、横浜市営地下鉄（計12社）

京王バス、小田急バス、東急バス、西武バス、東武バス、京成バス、京急バス、相鉄バス、都営バス、横浜市営バス（計10社）

※本アンケートのデータは自由に転載・引用いただくことが可能です。

転載・引用の際には、「あすぷろ実行委員会調査」または「あすぷろ調査による」と記載願います。

かつ、本調査が「ベビーカーで電車・バスなどの交通機関を利用される方」を対象とするものであることにご留意いただきますよう、よろしくお願いいたします。



ASSYstar's Project
あすぷろ実行委員会

以下、ASSYstar's Project の提唱者である中岡亜希さんからのメッセージです。

ASSYstar's Project (アシスターズプロジェクト) は民間主導のソーシャルプロジェクトです。

怪我、病気、加齢、子育てなど、人はいつか生活の不自由を経験します。

そんな時に自らの力だけではなく周りの人のアシストが必要になります。

私は日本航空の CA として世界中を飛び回っていた 25 歳の時突然、治療法・治療薬がない難病だと医師から告知されました。

体の自由が利かなくなっていく病気の進行の中で『不自由な体になっても、心まで不自由にはなりたくない。』と心に誓いました。

それから、車椅子で海外調査活動をする中で、困っている人がいると、大人はもちろん子どもやお年寄りまで、誰もが、誰かのアシストをごく自然に行う様を見て、日本の社会との差に驚きました。

何かに困っている時、整備された便利な物質的な環境だけでは人生を楽しむ選択肢は少なくなります。

まずは、多様な人々が共に人生を楽しむという世界標準の価値観をもっと日本に広め、それを人の手で実現できる社会環境を創造するこの事業を推進してゆきたい。

私はもう、機上で皆さんの旅のお供をすることは叶いません。

それでも、『きっと誰かの翼になれるはず。わたしの手も、そして、あなたの手も。』

できないとあきらめている人、困難を抱える人々をアシストするヒト、場所、モノを日本中に増やしたい、それが我々の目指すところです。

中岡亜希さんに関するお問い合わせは、当実行委員会監事 藤田然まで

fujita-zen@fujimikogen-resort.co.jp